

Native American and Indigenous Studies Association 参加記



5月19日から24日まで、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、アメリカ研究振興財団、北海道大学アイヌ・先住民センター（順不同）の支援を受けて、米国アリゾナ州トゥーソン市で開催された Native American and Indigenous Studies Association（以下 NAISA）の年次大会に参加し、発表を行うと共に、博物館展示に向けた資料収集を行った。

現在、本年8月に施行されるアリゾナ州の新しい移民法¹が人種差別的であるとして、全米各地で抗議活動が繰り広げられている。今回の NAISA 研究大会は、まさにその舞台であるアリゾナ州南部のメキシコ国境近くで開催されたために、大変政治的な色合いが強い大会となった。具体的には、参加もしくは発表予定であった人々のうち数十人が政治的理念を理由として欠席し、発表者の一部は内容を急遽変更して自らの発表時間を上に記した法律に関する演説に充てた。

上のような理由から、プログラムは学会が始まってからの刻々と変更され、プログラムに記載された発表が聞けるかどうかは部屋に行ってみないと分からない、という状況にな

¹ 詳細については筆者の解説 <http://borderstudies.jp/essays/essays/pdf/mizutani2.pdf>（北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」ウェブサイト内）に記されている。

っていた。そのため、楽しみにしていた発表やパネルの一部を聞くことができずに残念であったが、米国で現在最も大きな関心であるアリゾナ州の移民法に関して様々な意見を耳にするという大変貴重な機会に恵まれた。

そもそも同法は、ラテンアメリカ系、特にメキシコ系の不法移民を取り締まる理由から制定されたため、NAISA が直接関係する米国先住民の人々の多くには直接的利害が及ばないものである。しかしながら、そのような法律に対して米国先住民や彼らを取り巻く人々が抗議活動を行う現状の背景には、ことに 60 年代以降の米国先住民の権利獲得運動が、他の民族的少数者の運動と連携して行われてきた歴史が指摘できよう。さらに、筆者がこれまで研究対象としてきた先住民ヤキ (Yaqui) を始めとして、米国メキシコ国境地帯には、国境によって民族が分断された先住民が多く居住している。そのような先住民の人々には、特別な越境許可証や身分証明証の発行によって政府が支援を行おうとしているが、実際には国境警備隊や入国審査官の間で情報や知識が共有されておらず、誤って不法移民として拘留、送還されるケースが後を絶たない。そのような民族にとっては、上記のような法律改正は脅威に他ならず、抗議活動に参加するのは自然な流れであったのであろう。一方で、米国先住民が合法的に米国に居住しているのとは対照的に、不法移民は税金も納めず、その他の義務も果たしていないのであるから、上記の法に基づいて送還すべきである、と主張する人々も多く見られた。つまり、米国先住民と彼らを取り巻く人々の間には、一定の見解はなく、様々な意見が存在するように見受けられた。

そのような中でも、当初のプログラムに沿って発表や議論を行った参加者も多かった。筆者が参加した、ヤキに関するパネルもその 1 つであった。同パネルは、国境問題を含むヤキの歴史に関する学術的な発表（筆者の発表を含む）と、これまで大学等で研究資料として保管されてきたヤキの人々の遺骨の返還作業についてまとめたビデオ上映、そしてメキシコ側に居住するヤキの一員による土地権にまつわる発表によって構成された。発表は英語もしくはスペイン語で行われ、同時通訳によってそれぞれの言語にも訳された。結果として、ヤキの歴史と社会について、国境問題や土地権といった側面に着目しながら、多角的に検証が行われた。さらにこの問題は先に述べた移民法改正の話題とも関連しているために、発表後も参加者との意見交換が活発に行われた。

筆者が自らの発表の他に参加したセッションの中で最も興味を引かれたのは、ヤキと同様に国境地帯に居住する先住民族であるトオノ・オーダム (Tohono O'odham) によって行われている、伝統的食文化の復興プロジェクトについてのものであった。トオノ・オーダムは民族を挙げてこのプロジェクトに取り組んでいる。結果として、民族立レストランの運営、伝統料理のレシピ集の出版、保留区内の学校給食を通じた伝統料理の提供といった企画を実行することに成功した。レストランは内装も大変おしゃれで、レシピ集もまるで流行りのカフェを取り上げたファッション雑誌のように洒落ている。伝統料理を家庭料理の域に留めず、現代の若者が喜んで口にする形にアレンジすることは、ひいては先住民族の文化復興につながり、さらには米国先住民の多くが直面している不健康な食生活の改善

に大きく貢献すると考えられる。

学会の日程が終了した夜間は、トゥーソン市内のヤキ集落を訪問し、展示資料の収集を行った。具体的には、ヤキの文化の中で最も重要な位置を占める「花」を模った紙製の工芸品を収集し、さらにそれらを製作する様子をビデオで撮影した。これらの花は実在する花を模したものではなく、作り手が自由にデザインする。そのため花の形には年や季節毎に流行があり、またその作品を見ただけで作り手が分かる人も多いそうである。ヤキの精神世界の中では、イエス・キリストが十字架に掛けられた際に地面に飛び散った血が花となったと考えられている。儀礼の会場内に飾られた花は神の加護を受けた魔除けとして特に大切にされる。今回の調査では、他にも男性の踊り手が身につける貝の首飾りやスカーフも収集された。

11月からのヤキに関する展示は着々と詳細が決定されてきており、日本で初めてのヤキに関する企画展として地元アリゾナでの期待も高い。これから夏にかけて説明用パネルの作成や写真撮影などが行われる。展示開始を期待されたい。



水谷裕佳(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員)